

湯呑み茶碗とマグカップ

宮城県伊具郡

山家

孝(57)

誰よりも早く出勤して、大ぶりの湯呑み茶碗にインスタントのコーヒーを淹れる。

それが、社長の一日のはじまり、見慣れた朝の風景です。ただし、机の上にあった朝刊は、最近、帳簿や伝票にかわりました。古い得意先が、取引相手を中国の会社に切り替えてから、交替勤務で稼働していた設備は、その大半が動きを止めました。六人の工員たちは、毎日、清掃ばかりしているので、機械はみな新品のように輝いています。それでも、だれも工場を去ろうとはしません。社長が自らの収入を削って、親から引き継いだ工場を、従業員のためだけに存続させようと考えていることが、工員たちには分かっています。

ある日の朝、私はリストラの実行を社長に提案しました。古株の工員たちと話合った結果です。従業員を半分くらいに減らせば、なんとか工場を持ちこたえることができるかと進言しました。社長は、冷えたコーヒーをゆっくり口に含んで、

じっと目を閉じました。

一週間ほど過ぎて、社長は工員たちを事務所に集めました。

「工場を閉めることに決めたい」

家族を減らすことはできない。社長は、自分自身に言い聞かせるように告げました。

社長はここ数日、なじみの同業者をまわって、工員たちの再就職先によく目処をつけたそうです。

「退職金は、機械を処分してこさえるから心配するな」

穏やかに微笑んで言いました。

最後の朝。

社長の出勤前に工場の清掃を終えると、私たちは、新しいマグカップを社長の前に置きました。社長は照れ臭そうにカップをながめ廻していました。

「やはり俺は湯呑みがいいな」

笑いながら言う、まるで番茶でも飲むように、コーヒーをすすりました。

私たちの見慣れた、いつもの朝のように。